

● 教育研究の広場 ●

教鞭をとる事務職員

ー共通教育科目『キャンパスエコライフ～理論と実践～』における
コラボレーションー

法文学部 喜納 育江

文理融合、相互乗り入れ、チームティーチング。大学教育においてこのような授業形態が意識されるようになって久しい。異なる専門分野の教師が「センモン」の垣根を低くしてそれぞれの知識を共同で提供し、ひとつの科目を作り上げることによって、学生は複数の専門分野のつながりを感じることが出来る。あるいは、「分野」という境界線の引かれた専門領域が、思わず共有している問題に出くわす発見をするかもしれない。ひとりより二人、二人より三人、という複数の教育力というものは思いがけなく大きいし、教師が互いに刺激を受けることも多い。

教師にとってもスリリングなこのコラボレーション教育に、このたび事務職員が参加して下さった。今年度後期に共通教育総合科目として初提供されている『キャンパスエコライフ～理論と実践～』の授業である。事務職員が教室で教師として学生と接するのは、おそらく本学初の試みだろう。

この科目は全学的取り組みとしてすでにスタートしている本学の「エコキャンパス活動」の中で企画、立案された。これからの人間社会にますます必要とされる「エコ」の感覚を学生たちに定着させる方法は教育しかない。環境（エコ）についての講義を聴くだけでなく、実践を通して「エコ」の感覚を身につけられるような「大学レベル」の環境実践学のような科目をつくるべきだという意見から、渡久山章大学教育センター長、伊波美智子エコロジカル・キャンパス推進委員会副委員長を中心に練ったシラバスに、総勢8名の教員と2名の事務職員が参加することになり、私が第一回目のコーディネーターを引受けることになった。



▲教鞭を執る屋宮課長



▲学生の質問に答える金城補佐

15回の講義のうち、大学本部企画課から屋宮隆道課長と金城孝課長補佐が担当する講義は2回。お二人以外に数名の教員も参加した。テーマは、「キャンパス内の環境問題」である。エコロジカル・キャンパス推進委員会発足時からこの委員会の活動にたずさわっている屋宮課長は、環境問題には日頃から関心を寄せていらっしゃるそうである。大学の経営がどのように環境問題に影響を及ぼすかについて説き、学生が大学の環境づくりに積極的に関わることの重要性を宮城大学の視察で痛感したという経験談を語って下さった。また、金城補佐は以前、経理担当だったこともあり数字にたいへん強い。琉球大学が消費する電力量、電気料金、排出す

る廃棄物の量、処理費などのデータを披露し、その説得力は学生のみならず私たち教員も圧倒した。授業の2回目は、大学内の環境に関わる施設や現場の視察へと同行して下さった。学内の廃棄場、水処理施設、上原キャンパスの廃棄物堆肥化施設、環境安全センターなど、事務職員間のコネ(?)を活かし、各視察場所では専門の職員の説明も聴くことができとても勉強になった。

琉球大学が事業者としてどのように地域の環境に関与しているかという今回のこのテーマについて、屋宮課長と金城補佐以上にふさわしい教師はいなかったと思う。毎日の職務のなかで培った経験と知恵、そして知識をダイレクトに投げかけることによって、学生も毎日過すキャンパスがどのような「実践」の場になりうるかというビジョンを得ることができただろう。また、私たち教員にとっても事務職員ならではの専門知識から学ぶところは多かった。法人化によって授業への創意工夫がますます重視される昨今、画期的なアイデアでより教育効果の授業を創造していこうとする姿勢が必要である。これからの大学教育のあり方について考えるきっかけともなった今回の両氏のプロとしての熱意と協力に感謝したい。

[学報トップ](#)